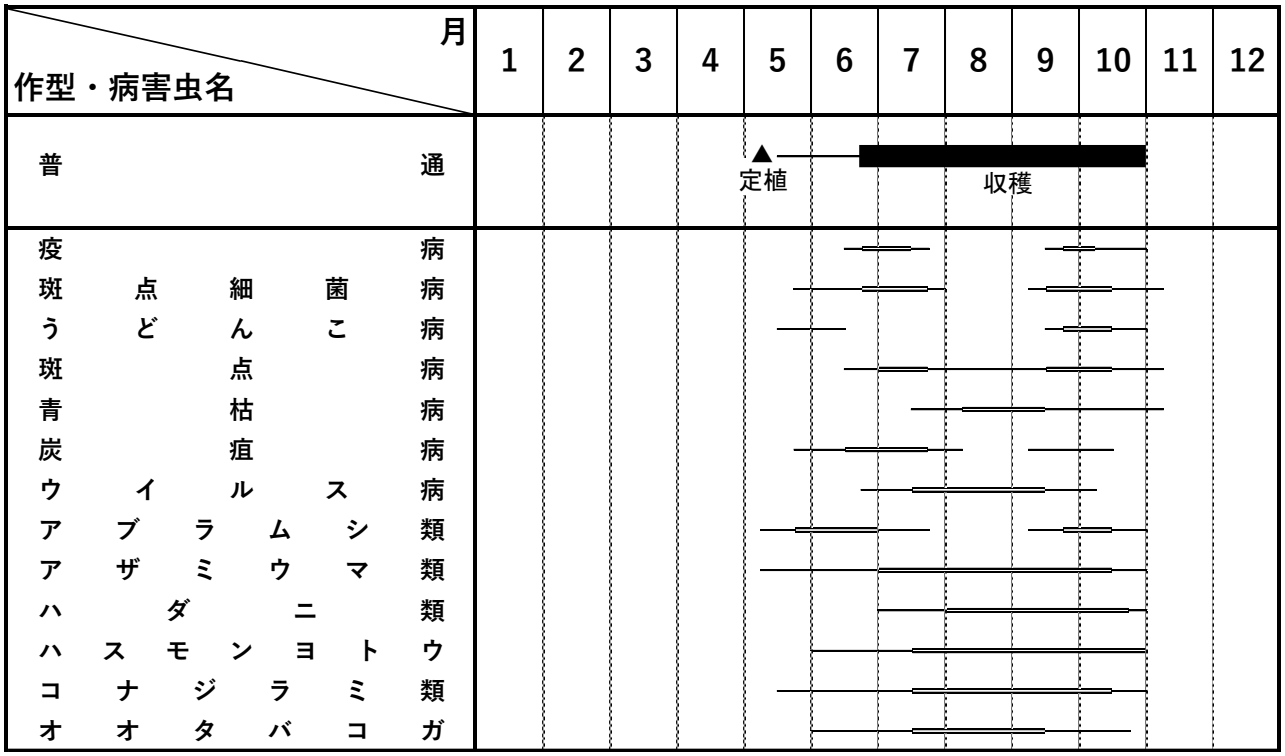
# ピーマン

農薬取締法上、「ピーマン」は「とうがらし類」とは別作物である。
「ピーマン」は、「ピーマン」、「ピーマン及びとうがらし類」、「なす科果菜類」、「野菜類」に適用のある農薬を使用すること。
「ピーマン」には、カラーピーマン、カリフォルニアワンダー、パプリカなどが含まれる。




## 疫病

留意事項

1 降雨による土壌の跳ね上がりで伝染する。

防除方法

1 土の跳ね上がり防止のため、敷わらなどでマルチングを行う。
2 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避ける。
3 発病株の早期発見に努め、発病した果実、枝等は直ちに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 排水を良好にして過湿を避ける。
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ランマンフロアブル ２１ 【2000倍　前日／4回】
・ライメイフロアブル ２１ 【2000～4000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・レーバスフロアブル ４０【2000倍　前日／2回】

## 斑点細菌病

留意事項

1 梅雨と秋の長雨の多湿時に発生が多い。
2 カスミンボルドー、カッパーシン水和剤は、眼に対して強い刺激性があるので眼に入らないよう注意する。

防除方法

1 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。
2 被害茎葉は伝染源となるので早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・カスミンボルドー、カッパーシン水和剤 ２４ Ｍ１【1000倍　前日／5回】

## うどんこ病

留意事項

1 25℃前後で乾燥時に発生が多い。
2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
3 SDHI剤（7）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 窒素過多を避ける。
2 下記の薬剤を予防的に散布する。
・ダコニール1000 Ｍ５【1000倍　前日／3回】
・フルピカフロアブル ９【2000倍　前日／4回】
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・トリフミン水和剤 ３【3000～5000倍　前日／5回】
・ベンレート水和剤 １【2000～3000倍　前日／3回】
・アフェットフロアブル 7【2000～4000倍　前日／3回】

## 斑点病

留意事項

1 多湿を好み、梅雨と秋の長雨時期に発生が多い。
2 カスミンボルドー、カッパーシン水和剤は、眼に対して強い刺激性があるので眼に入らないよう注意する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

1 被害茎葉は伝染源となるので早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ラリー水和剤 3 【4000～6000倍　前日／4回】

・カスミンボルドー、カッパーシン水和剤 ２４ Ｍ１ 【1000倍　前日／5回】

・ベンレート水和剤 1 【2000～3000倍　前日／3回】

## 青枯病

留意事項

1 病原菌は、土壌中で長期間生存し、土壌伝染する。

2 気温20℃以上で発生し、25℃以上で多発する。

防除方法

1 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避ける。

2 センチュウ類防除を徹底する。

3 排水を良好にし、過湿、過乾燥を避ける。

4 地温の上昇を防ぐため、敷きわらなどを行う。

5 発病株は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

6 化学肥料等の集中的な施用を避け、根を傷めないようにする。

7 ハウスでは、夏期高温時に太陽熱利用による土壌消毒を行う。

（Ⅻ土壌消毒　1太陽熱利用による土壌消毒　参照）

## 炭疽病（たんそびょう）

留意事項

1 温暖で雨が多いときに発生が多い。

2 病斑上の胞子が、雨等の水滴で飛散、伝播する。

3 種子伝染する。

4 QoI剤（１１）は、耐性菌が出現しやすいので1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 排水を良好にする。

2 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。

3 発病した果実や葉は、早めに除去するともに、被害株は収穫後、ほ場外へ持ち出し処分する。

4 下記の薬剤を予防的に散布する。

・ダコニール1000 Ｍ５ 【1000倍　前日／3回】

・セイビアーフロアブル20 １２ 【1000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

5 発生と認めたら下記の薬剤を施用する。
・ベンレート水和剤 1 【2000～3000倍　前日／3回】
・スクレアフロアブル １１ 【2000倍　前日／3回】

## ウイルス病

留意事項

1 モザイク病として、トウガラシマイルドモットルウイルス（PMMoV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）を病原とするものの他に、トマト黄化えそウイルス（TSWV）などがある。
2 生育初期の感染は被害が大きい。
3 ハサミ等で芽かきする際にウイルスが伝搬するおそれがある。

防除方法

1 アブラムシ類（キュウリモザイクウイルス（CMV））、アザミウマ類（トマト黄化えそウイルス（TSWV））の防除に努める。（アブラムシ類、アザミウマ類の項参照）
3 発病株は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

## アブラムシ類

留意事項

1 主にワタアブラムシ、モモアカアブラムシが発生する。
2 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は3回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。

防除方法

1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
2 苗床は寒冷しゃで被覆し、アブラムシ類の侵入を防ぐ。
3 下記の薬剤を施用する。
・ダントツ粒剤 ４Ａ
【1g／株　株元処理　育苗期後半／1回】または
【1g／株　植穴処理土壌混和　定植時／1回】
【1～2g／株　株元散布　定植後（前日）／2回】
・ベリマークSC ２８
【400株当たり25ml　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】または
【400株当たり25ml　株元かん注　定植直後／1回】
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ４Ａ 【3000倍　前日／2回】
・コルト顆粒水和剤 ９Ｂ 【4000倍　前日／2回】
・モベントフロアブル ２３ 【2000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・トランスフォームフロアブル ４Ｃ【2000倍　前日／2回】

## アザミウマ類

留意事項

1 主にミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマが発生する。
2 ミナミキイロアザミウマは果実に直接的な被害を生じる。ミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマはウイルス病を媒介する。
3 虫は葉裏、花、幼果（へたの下）に多い。
4 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 ほ場周辺の除草を行う。
2 ハウス開口部を赤色ネット（目合い0.8mm）で被覆する。
3 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
4 下記の薬剤を施用する。

・ベリマークSC ２８
【400株当たり25ml　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】
・ベストガード粒剤 ４Ａ
【ミナミキイロアザミウマ　1～2g／株　植穴処理土壌混和　定植時／1回】

5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・グレーシア乳剤 ３０【2000倍　前日／2回】
・ディアナSC ５【2500～5000倍　前日／2回】
・モベントフロアブル ２３【2000倍　前日／3回】
・プレオフロアブル ＵＮ【1000倍　前日／2回】
・ファインセーブフロアブル 劇 ３４【1000～2000倍　前日／3回】
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ４Ａ【2000倍　前日／2回】

## ハダニ類

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
2 カンザワハダニとナミハダニが寄生する。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ニッソラン水和剤 １０Ａ【2000～3000倍　前日／2回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・コテツフロアブル 劇 １３【2000倍　前日／2回】
・マイトコーネフロアブル ２０Ｄ【1000倍　前日／1回】
・ダブルフェースフロアブル ２５Ｂ ２１Ａ【2000倍　前日／1回】
・スターマイトフロアブル ２５Ａ【2000倍　前日／1回】

## ハスモンヨトウ

留意事項

1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ディアナSC ５【2500～5000倍　前日／2回】
・アタブロン乳剤 １５【2000倍　前日／3回】
・ファルコンフロアブル １８【4000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 １１Ａ（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

## コナジラミ類

留意事項

1 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
2 すすの発生やトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を伝搬させるほか、果実の着色不良の原因となる。
3 スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。
4 キルパーは、「適用病害虫（設定なし）」で、使用目的として、「コナジラミ類蔓延防止」とした登録がある。使用方法は、「予め被覆した内で、所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布または、かん水する」。

防除方法

1 ハウス開口部を防虫ネット（目合い0.4㎜）で被覆する。
2 栽培終了後、ハウス内の作物残さや雑草を除去し、ハウスを密閉して残っていた虫を殺す。
3 発生初期に、天敵寄生蜂のオンシツツヤコバチを放飼する。
4 下記の薬剤を施用する。
・ベリマークSC ２８
【400株当たり25ml　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・モベントフロアブル ２３【500倍　かん注　育苗期後半～定植当日／1回】

5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・グレーシア乳剤 ３０【2000倍　前日／2回】
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ４Ａ【2000～3000倍　前日／2回】
・トランスフォームフロアブル ４Ｃ【1000～2000倍　前日／2回】
・コルト顆粒水和剤 ９Ｂ【4000倍　前日／2回】

6 前作栽培終了後から残さ撤去までに、コナジラミ類の蔓延防止を目的として下記の薬剤を施用する。
・キルパー ８Ｆ
【適用病害虫（設定なし）　原液として40～60L／10a
前作のトマトまたはミニトマトのコナジラミ類蔓延防止
前作栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）／1回】
【適用病害虫（設定なし）　原液として60L／10a
前作のきゅうりのコナジラミ類蔓延防止
前作栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）／1回】

7 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除1（1）　参照）

## オオタバコガ

留意事項

1 多犯性で、多くの作物を加害する。
2 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。
3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 幼虫による被害が大きいので、食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。
2 摘除した茎葉や果実、被害果にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アファーム乳剤 ６【2000倍　前日／2回】
・ベネビアOD ２８【2000～4000倍　前日／3回】
・プレオフロアブル ＵＮ【タバコガ類　1000倍　前日／2回】
・コテツフロアブル 劇 １３【2000倍　前日／2回】
・ＢＴ剤 １１Ａ（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

## 病虫害と間違いやすい生理障害

## 尻腐れ果

留意事項

1 初夏の高温で乾湿の差が激しく、窒素質肥料の肥効が高い時に発生しやすい。

2 石灰欠乏に伴う生理障害である。

防除方法

1 堆肥を十分施すとともに、窒素質肥料の過用を避ける。

2 深耕し、保水力の強い土づくりに努める。

3 土壌の過乾過湿を防ぐため、ビニルマルチや敷わらなどを行う。

4 塩化カルシウム200～300倍液を葉面散布する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。